

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 05 月 17 日現在

機関番号：10107

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520486

研究課題名（和文）反一致現象の研究

研究課題名（英文）A Study on Anti-agreement Phenomena

研究代表者

三好 暢博 (MIYOSHI NOBUHIRO)

旭川医科大学・医学部・准教授

研究者番号：30344633

研究成果の概要（和文）：Chomsky(2005, 2008)以降、素性継承（*inheritance*）という概念は、人間言語の計算体系の本質が厳密派生的であることを保証する上で、フェイズ(*phase*)を単位とした派生計算において重要な役割を担っている。本研究は、完全な形での素性継承が阻止されているのが反一致現象であることを示した。この結論は、素性継承が不完全な形で適用されている他の現象からも支持される。この研究の主要な理論的意義は、逆接的ではあるが素性継承の存在を経験的に支持することにある。

研究成果の概要（英文）：Since Chomsky (2005, 2008), the notion of *inheritance* has played an important role in in the phase-based syntax, ensuring strict derivational nature of the computational system. This study argued for the hypothesis that full-fledged *inheritance* is blocked in anti-agreement. This conclusion was further reinforced by other related phenomena in which full-fledged inheritance does not take place. Though somewhat paradoxical, a major theoretical implication of the study is to provide empirical evidence for *inheritance*.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英語学

キーワード：反一致、素性継承、EPP、フェイズ、ミニマリスト・プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

言語の経済性の研究等を通して 1990 年代初頭に生成文法統語論がたどり着いた見解は、言語が、ある意味非常に利己的で、言語の内部での計算の経済性を追求しているだけで、そもそも使用を目的として設

計されてはいないという仮説である。一致現象に課される制約の存在は、規範的には予測されない一致形態素の出現を意味するがゆえに、言語に固有の計算特性を反映している可能性がある。素性継承を仮定したフェイズ・モデルの主張は、フェイズ内

部の操作がフェイズ主要部を起点として行われ、フェイズが閉じた計算領域を形成するというものである。このモデルの根幹を支えているのが素性継承である以上、素性継承の経験的妥当性を検証することは、理論方向性を占う上で重要である。

素性継承が実在するならば、伝統的には、フェイズ主要部の素性ではないと仮定されてきた統語素性がフェイズの主要部等で認可されている現象が問題となる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、反一致現象の分析を提示し、その理論的意義を明らかにすることで言語理論の深化に寄与することにある。より具体的には、反一致現象及びその関連現象を整理し、理論的解釈が可能な形の一般化を提示することを第一の目標とする。その上で、反一致現象の統語的メカニズムを解明し、その理論的含意を明示することを目標とする。

## 3. 研究の方法

まず、広義の一致に課される制約に関する調査も平行して行うことで、統語と形態論との役割分担に関する基本指針を決定した。その後、代表的な反一致現象に関する統語分析を行った。この分析結果を踏まえ、関連する統語現象の分析を行った。

## 4. 研究成果

### ① 統語と形態の分業—反一致現象は形態論的説明のみによってはとらえられない

反一致現象は、広義の一致に課される制約 (Agreement Restriction) に属する。一致に課される制約とは、特定の形態統語素性の組み合わせを禁じるという現象を指す。事例研究として、アイヌ語、ピロキシ語、カルク語の人称接辞の消失及び、アイスランド語 (与格構文) の分析を行った。特定の統語素性の組み合わせが禁じられる理由は 2 つに大別される。統語的理由により排除されてしまう場合と、形態論的理由により remedy される場合である。Remedy に関しては、形態部門で impoverishment という素性削除規則が適用される。有標のものから無標の形態表示に変換されることになる (Miyoshi (2010))。

反一致現象は、形態部門で impoverishment という素性削除規則が適用される場合もあるが (ブレトン語等)、統語的環境がかなり制限されているため、主語後置際に観察される一致の非対称性 (agreement asymmetries) として扱うべきであると考えられる。さらに、範囲一致現象すべてを impoverishment の基

本特性である「有標の形態表示を無標の形態表示へ」という形態分析が必ずしも自然とは言い切れない例が存在した (キナンデ語)。このため、反一致現象は形態論的説明のみによっては捉えることが困難であるという結論を採用した。

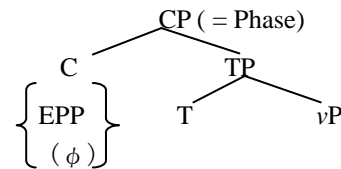
### ② 反一致現象と素性継承

反一致現象の主要な統語的特性は以下 3 点である。1) 主語に A' -移動が適用されていなくてはならない。2) 規範的な主語と動詞の一致形態素が、一種の Default Agreement ないしは特別な一致を示す形態素に置き換えられる。3) 空主語を許す言語に限られる。

反一致現象は、C から T への素性継承が生じていない現象であるというのが本研究の中核をなす分析である。

具体的には、(i) の構造に示される。

#### (i) 反一致

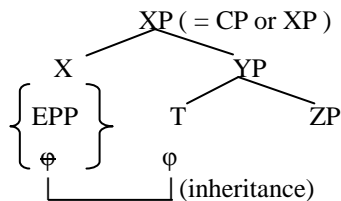


すなわち、 $\phi$  素性ばかりでなく、伝統的に T の素性とされてきた EPP 素性がフェイズ主要部である C に残留している現象が反一致現象である。この分析の帰結として、上述の特性 1) 及び 2) に説明が与えられることとなる。

$\phi$  素性が継承の対象とならないという事実には、2 つ可能性が関係していると考えられる。一つはトルコ語及びその諸方言のように、 $\phi$  素性自体が存在しないか、あるいは、不活性化されている言語の場合である (Miyamoto (2013))。この知見は、ある意味で、Miyagawa (2010) の一致に関する比較統語論的研究と軌を一にするものであるが、ブレトン語及び北イタリアの諸方言 (トレンティーノ語・フィオレンティーノ語等) を考慮すると、A 移動に関して  $\phi$  素性が統語的に活性化されると考えられる言語であっても反一致現象が観察される以上、 $\phi$  素性の継承とは独立した現象であると考えられる (Miyoshi (in prep.))。なお、素性継承が阻止される環境を  $\phi$  素性から同定するという試みは干渉要因が多く明確な結論に至らなかった。しかしながら、アルタイ語族の調査から、 $\phi$  素性の活性化なしに A-移動が駆動される言語においては、 $\phi$  素性の不活性化が何らかの役割を果たしている可能性が高いことを付記しておく。

最後の特性、すなわち、反一致現象が空主語を許す言語に限られるという Ouhalla(1993)の観察は、注意が必要である。伝統的な反一致現象の分析では、主語の空所に音型のない *resumptive pro* を仮定していた。しかしキクユ語の存在はこのようなアプローチの限界を示唆している。キクユ語には、空の *resumptive pro* を認める独立した証拠に乏しい。さらに、*resumptive pronoun* が存在したとしても、移動制約の違反を回避するために挿入される *intrusive pronoun* の可能性が高いため、反一致現象の環境で生起する可能性は非常に低い。したがって、反一致現象と空主語の相関を捉える新たな仮説が必要となった。本研究では、EPP が PF の要請と関連があると推測し、伝統的な意味での EPP が義務的ではない言語のみが反一致現象を許す言語であるという仮説を立てた。この仮説を検証するために、EPP がフェイズ主要部に残留し、(ii)に図示される部分継承 (*partial inheritance*) が関与する現象を反一致現象の関連現象とした。

(i) 部分継承 (partial inheritance)



③ 関連現象 I : 節頭虚辞 (clause-initial expletive)

伝統的には、虚辞分布により TP の指定部の EPP を調べることが可能であるという暗黙の合意があった。しかし、アイスランド語に代表される *Insular Scandinavians* 及びイーディシュ語、ドイツ語では、音形を持った虚辞が節頭に現れなくてはならない。この現象を部分継承 (*partial inheritance*) が関与する現象であることを明らかにした。具体的には、上述の言語における虚辞の文頭制約が、フェイズ主要部にある EPP 素性と  $\phi$  素性の内、 $\phi$  素性のみを継承できるというオプションを持つためであるという分析を提示した (Miyoshi and Tozawa (2011), Miyoshi (2012))。

この分析は、補文内の話題化と虚辞の分布に相関があることから経験的に支持される。さらに、EPP を edge 素性として扱うというアプローチを支持する結果を得た。

④ 孤立した EPP 素性に課される制約

節頭虚辞の分析の結果、単独でフェイズ主要部に残留した EPP は (ii) の条件に従うことが明らかになった。

(ii) 単独でフェイズ主要部に残留した EPP を認可する要素は当該の edge にとどまることはできない

フェイズの edge にとどまる要素は、interface で、Topic/Focus 等の解釈が与えられる、談話関連素性を担う要素である。条件 (ii) は、節頭虚辞制約の対象となる虚辞がフェイズ主要部に付加する構造を持つと結論付けられる。この結論は、話題化とは異なり、補文内での節頭虚辞制約に従う虚辞が、島 (island) を形成しないという事実から支持される。

⑤ 関連現象 II : 文体倒置

(Stylistic Fronting)

アイスランド語の文体倒置の主要特性は、以下5点である。1) 過去分詞、形容詞、特定の副詞等を前置する操作で、一種の主要部移動が関与する。2) 強調や焦点化とは関係していない。3) 文境界を超えることはない。4) TP 指定部 (文副詞に先行する位置) に顕在的主語がない。5) 話題化とは異なり、島 (island) を形成しない。

これらの特性から、文体倒置は、フェイズ主要部に単独で残留している EPP を認可している現象である。本研究では、文体倒置の諸特性が、条件 (ii) から導かれることが明らかにした。したがって、文体倒置の存在は、(i) の部分継承の更なる証拠となるばかりでなく、条件 (ii) に経験的支持を与えるものである。(Miyoshi and Tozawa (2011), Miyoshi (2012))

⑥ 関連現象 III : *wager* 類動詞

英語の *wager* 類動詞という特殊な ECM 構文とアイスランド語の文体倒置との抽象的類似性を明らかにし、*wager* 類動詞の諸特性が、部分継承と条件 (ii) から導かれることを示した。*wager* 類動詞と標準的な ECM 構文の大きな違いは、句レベルの不定詞主語が不定詞補文の主語位置に残留できないという事実である。この事実を、条件 (ii) から導かれることを示した。したがって、*wager* 類動詞の特異性は、 $vP$  フェイズでの部分継承の証拠と結論付けられる。(Miyoshi 2012)

⑦ 関連現象 IV : Wh-copying と主要部性

Wh-copying とはドイツ語諸方言等に観察される現象で、疑問詞の中間痕跡に相当するコピーが発音されるという現象である。発音される中間コピーは、単純疑問詞でなくてはならず、複合疑問詞で

あつてならないという制約が存在する。この制約と、アイスランド語の文体倒置と *wager* 類動詞の抽象的類似性を指摘し、条件(ii)から導かれることを示した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① Miyoshi, Nobuhiro: “On Agreement Restrictions in Ainu,” *Explorations English Linguistics* 24, 2010, 119-158. (査読有)
- ② Miyoshi, Nobuhiro and Tozawa, Takahiro: “Feature Inheritance and a Condition on Pure EPP satisfaction,” *Studies in English Literatures Regional Branches Combined Issue Vol.IV*, 2011, 81-90. (査読有)
- ③ Miyoshi, Nobuhiro: “Shigeru Miyagawa, Why agree? Why move? Unifying Agreement-Based and Discourse Configurational Language” *Studies in English Literatures* 53, 2012, 162-170. (査読有)
- ④ Miyoshi, Nobuhiro : “EPP as an Edge Feature: An Investigation of Inheritance,” *Explorations English Linguistics* 26, 2012, 25-62. (査読有)
- ⑤ MIYAMOTO, Yoichi: “A Note on Agreement in Turkish Relative Clauses,” 言語文化共同研究プロジェクト『自然言語への理論的アプローチ 2012』, 2013, 49-58. (査読無)

[学会発表] (計7件)

- ① 三好暢博: 「アイヌ語の人称接辞に課される制約についての通言語的考察」 *Morphology and Lexicon Forum* 10. (20100711). 国立国語研究所
- ② 三好暢博、戸澤隆広: 「素性継承の帰結としての虚辞及び A'-position における格付与に関する考察」 日本英文学会第 55 回北海道支部大会. (20101002). 北海道大学
- ③ Miyoshi, Nobuhiro, Tozawa, Takahiro: "Feature inheritance and EPP satisfaction" *New Perspectives of Generative Grammar*. (20101126). Hokkaido University
- ④ 三好暢博 「反一致現象をめぐる諸問題」北海道理論言語学研究会第 1 回大会 (2011811) 北見工業大学
- ⑤ 三好暢博 「Wager-class verbs と素性継承: 反一致現象としての考察」日本英語英文学会 第 23 回年次大会 <シンポジウム> 「非定形節の諸問題」司会 野村忠央 (20130302) 東京家政大学
- ⑥ 三好暢博 「Wh-copying の理論的意義」北

海道理論言語学研究会 第 5 回大会 (シンポジウム) 『素性継承と主要部』司会 三好暢博 (20130307) 北海道教育大学旭川校

- ⑦ 宮本陽一 “On Agreement in Turkish Relative Clauses,” 「北海道理論言語学研究会 第 5 回大会 (シンポジウム) 「関係節化をめぐる諸問題」司会 宮本陽一 (20130308) 北海道教育大学旭川校

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

三好 暢博 (MIYOSHI NOBUHIRO)  
旭川医科大学・医学部・准教授  
研究者番号: 30344633

##### (2) 研究分担者

宮本 陽一 (MIYAMOTO YOICHI)  
大阪大学・言語文化研究科 (研究院)・准教授  
研究者番号: 50301271

##### (3) 連携研究者

戸澤 隆弘 (TOZAWA TAKAHIRO)  
北見工業大学・共通講座・准教授  
研究者番号: 70568443